

PROGRAM

ソナタ イ短調Op42 シューベルト

モデラート
アンダンテボコモッソ
スケルツオ
ロンド

妖精はよい踊り子
ヒースの茂る荒れ地
奇人・ラヴィース将軍
月の光がふりそそぐテラス
水の精

ドビュッシー

タベの調べ
メフィス・ワルツ 第1番

リスト

インタビュー 太田 茉莉
森田 真実

四季のコンサート 夏

1984年7月19日(木) PM7:00

浜松市民会館

主催 浜松音楽友の会

後援 浜松市教育委員会

スムア 鋼管樂曲

吉澤幸司作曲 銀河物語

。歌詞は作曲者 12月 4日(火) PM6:30

歌 呂子 7月17日(土) PM7:00

。歌詞は作曲者 10月15日(月) PM7:00

アーヴィング・アーヴィング著

。吉澤幸司作曲。輸入日本語訳詞と一括りで販売されています。

。アーヴィング著。輸入日本語訳詞と一括りで販売されています。

。吉澤幸司作曲。輸入日本語訳詞と一括りで販売されています。

。吉澤幸司作曲。輸入日本語訳詞と一括りで販売されています。

在活躍の場を拡げてきました。

多方面で、日本でも世界的に活動する活躍家、国内外で活躍す

る多方面で、日本でも世界的に活動する活躍家、国内外で活躍す



野島 稔ピアノリサイタル

総 販 売 (みのり まつり)

バーレック

ソナタイ短調 Op42 (D. 845)

Schubert (1793-1828)

「野ばら」や「魔王」などの作曲で知られている「歌曲王」ショーベルトは1973年ドイツのリヒテンタールで生まれ、1823年ウィーンで亡くなったウィーン古典派最後の作曲家である。わずか31年の生命だったにもかかわらず、この間に、歌曲を中心として1000点もの器楽曲、交響曲、室内楽曲などを制作している。彼独自の旋律の美しさは、歌曲によって一番生かされているが、ソナタの中でも、部分的に非常に豊かな旋律を歌い上げているものが少なくない。

このピアノ・ソナタは、ソナタとしては、書き始めて10年目、中期の作品であるが、ショーベルト自身も「グランド・ソナタ」と記し、ペートーヴェンが数々の自作を献呈していたことで知られるルドルフ大公に献呈されていることから、相当の自信作だったと思われる。曲は第楽章より成り、堂々たる威厳を持った曲で傑作の一つと数えられている。

前奏曲集

Debussy (1862-1918)

ドビュッシーは印象派の音楽家とされているが、この印象派という言葉は非常に曖昧でわかりにくい。これは絵画の象徴主義、文学の印象主義に匹敵するもので、ポードレールやマラメル、クレー、モントリアンなど密接な関係がある。

この時代、音楽でもロマン主義が眼界に達し、作曲家は新しい道を切り開こうとあらゆる手法を試みたが、これといって打開策は見つからなかった。そのような時、ドイツではワグナーが半音階の技法を確立し、新しい道への第一歩を踏みだしたかのように見えた。しかしこれも結局、ロマン主義の中での発展に留まり、現代を切り開く所までは行かなかったようだ。しかし、ヨーロッパ中の作曲家がワグナーの影響を受けたことは確かである。ドビュッシーも初期のうちこそ傾倒していたが、彼は早々と見限り、真に新しい音感覚によって現代への手がかりを提起したのである。ワグナーは、それまで絶対であった機能和声を押し始めた究極であったが、ドビュッシーのそれは機能和声のいわゆる禁例を頻繁に用い、東西の旋法などを取り入れることによって作られている。

この「前奏曲集」は、ドビュッシー晩年の作で、最も円熟した時代のものであり、そしてドビュッシーの全作品中、最もすばらしいものの一つである。これは、I巻、II巻各12曲ずつで計24曲、たぶんショパンの24の前奏曲集を意識したものと思われるが、その第II巻から4曲～8曲までを演奏する。

妖精はよい踊り子

バリの「ピーター・パン」の中に、蜘蛛の糸の上で仙女が蜘蛛の弾くチェロに合わせて踊る場面があるが、その踊る仙女を描いた画をもとに作曲された。

5連符・7連符・トリルなど、多彩なリズムで、仙女の舞を形容する。

ヒースの茂る荒れ地

第I集「姫魔の髪のおとめ」を思わせる。五音音階による単旋律の主題で始まる冒頭や、再現部でもう一度主題がオクターヴ高く歌われるところも同じ手法によるものである。

ヒースは、白・紫色の花をつけるシャクナゲ科の灌木。そのヒースが生い茂った荒れた草原に、ヒバリが時たまさえする。

奇人・ラヴィース将軍

ラヴィース将軍とは1910年当時の劇場で人気のあったあやつり人形のことである。ロートレックの風刺画にある皮肉屋で奇想天外なキャラクターから、着想を得ている。「子供の領分」の中にある「ゴリウォッカのケーキ・ウォーク」を連想させるが、冒頭に「ケーキ・ウォークの様式と動きで」と標示されているとおり、同一のリズム・パターンを持つ。尚、ケーキ・ウォークとは19C末のアメリカ黒人音楽由来するダンス音楽である。

月の光がふりそそぐテラス

ドビュッシーの作品の中で「月の光」を題材としているものが、幾つかあるが、これは印象主義の絵画と同じく光を描写するテーマが、音楽においても貫かれている表われである。「光なくして印象派は語れない」といっても、言い過ぎではないと思うが、こと「月の光」を題材としたものに関してドビュッシーは、どれも絶妙なうまさを見せる。

この曲は、インドについて書かれたものから着想を得たらしいが、クロマティックな線で縁どられ、音塊で色づけされた東洋的な響きが聞こえる。

水の精

ドイツの作曲家フーケの書いた「オンディース（水の精）」にもとづいて作曲されたもので、ドビュッシーの響きとリズムの革新を証明する、「前奏曲集より」の最後を飾るにふさわしい曲である。同時代のラヴェルも、同じ題材で曲を作っている。幻想的な水の精の世界を表す。

超絶技巧練習曲

Liszt (1811-1886)

リストは大変なピアノの名手であった。聽衆はリストの妙技に感嘆し、彼はさらに難しい技巧を有する曲を作り披露した。当時は、作曲家と演奏家の区別がほとんどなかったので、彼に優る作曲家兼ピアニストは稀にしかいなかった。そういう意味で作曲された「超絶技巧練習曲」は今でこそ多くの演奏家がレパートリーの一つに取り上げるが、リストの時代では「リスト以外に演奏できる者はいない」と言われたほど難曲とされていた。

リストと同年代に、やはりバイオリンの名手で作曲家でもあるバガニーニがいた。彼は作曲においてはリスト程の個性の持ち主とは言えないが、リストは「ピアノのバガニーニになる」ために技巧を追求した。リストのピアノ曲はオーケストラのような色彩や厚みを持ったものが多いが、これも彼の演奏家としての名人芸的な表われであることを否めない。しかし、よい意味でそれが一つの個性となっている。

夕べの調べ

題のとおり、夕べの雰囲気を表わしたもの。静かな夕べに突如、鳴り響く鐘の音、そして又再び何事もなかったかのように夕闇だけがあたり一面を覆っている。そのような情景が思い浮かぶ。

メフィスト・ワルツ 第1番

リストは1860年49歳の時、ドイツの文学者レーナウの叙事詩「ファウスト」による「管弦楽のための2つのエピソード」を作曲した。この第2曲「村の酒場の踊り」をピアノ独奏用に編曲したものが「メフィスト・ワルツ第1番」である。

悪魔メフィストがファウストを連れて村の居酒屋へ表われ、自らバイオリンを弾き出す。人々は悪魔の魅力あふれる音楽に魅了され狂ったように踊り出す。ファウストはメフィストの魔力で踊っている途中に知りあった村の娘と愛し合うようになり、二人は森に姿を消していく、というあらすじである。愛し合う二人を見て、悪魔が高笑いするかのようなコーダで曲を終わる。